

羽地、今帰仁地区におけるハマフエフキ（タマン）の資源保護への取り組み

羽地・今帰仁漁業協同組合資源管理委員会

副会長 上原 康之

1. 地域の概要

羽地漁業協同組合は沖縄県本島北部に位置し、旧羽地村と大宜味村から成り立っており、沖縄では数少ない風光明媚な羽地内海と塩屋湾を擁している。今帰仁漁業協同組合は本島北部に位置し、緑豊かな山と美しい海に囲まれ、古宇利島が一望できる。古宇利大橋が開通して以来、多くの人々が島を訪れ、本島側からの景色や橋の上から眺める海は人々の心に安らぎを与える地域として知られている。

2. 漁業の概要

羽地内海及び塩屋湾は内湾特有の魚と、外海に続くイノーは海藻や貝類の種類が多く、主な漁業として潜水漁業や定置網、刺し網等が行われてきた。近年は内海域で魚類養殖も盛んになり、県内で最大の生産規模を誇っている。今帰仁地区では内外海特有の魚と貝類が多く、特にシラヒゲウニの産地として名を広め、近年はモズク養殖に力を入れている。

3. 研究グループの組織と運営

平成12年度より、羽地・今帰仁漁業協同組合資源管理委員会を発足し、ハマフエフキ（方言名：タマン）【資料1】の幼魚（1歳魚）が捕獲されやすい時期や水域を特定し、禁漁期間を設ける等の資源管理に取り組むこととした。同委員会は12名の漁業者と名護市産業建設課、大宜味村経済課、今帰仁村経済課の担当職員及び県水産業改良普及センター普及員の計16名で構成され、それぞれ役割分担してハマフエフキの資源保護に係わっている。同事業は主に市町村からの補助と漁協の予算の一部により運営している。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

羽地、今帰仁両地先において魚類特にフエフキダイ属の水揚げは1980年頃から減少し始め、その後20年の間に約1/2～1/4程度まで減少し、私たち漁業者の間で将来これらの魚類が枯渇しないよう、資源保護への関心が強まってきた。そこで、これらの地先資源の維持、増大を図ることを目的とし、両漁協合同で資源管理委員会を発足した。

まず、1984年から県の水産試験場が行ってきたハマフエフキ、イソフエフキ、アマミフエフキ、ホオアカクチビの4種を対象とした生態研究の結果をもとに、中でももっとも漁獲圧の高いハマフエフキの資源を回復するため、管理の一貫として禁漁区域と禁漁期間の設定について検討した。

水産試験場が調査した羽地、今帰仁海域における1999年から2000年までのハマフエフキの漁獲データによると、生まれて1年経過した1歳魚にあたる大きさの魚が多く漁獲されていることが分かった【資料2】。

そこで、資源管理委員会では1歳魚が最も多く現れる場所を禁漁区とし、その頻度の高い時期を禁漁期とすることとなった。これにより、将来的に2歳、3歳と大きくなったハマフエフキの増加が期待される。

5. 研究・実践活動状況及び成果（効果）

（1）禁漁区域、禁漁時期の選定

水産試験場の生態研究では、ハマフエフキの1歳魚はホンダワラ等の藻場の外縁部にあたる水深15～20mの岩場に生息することが分かっており、これと潜水漁業者の目撃例をあわせて、今帰仁村運天地先と名護市屋我地先の2カ所に1歳魚が多くいるだろうと判断された【資料3】。

そこで、禁漁区をこれら2カ所とし、禁漁期間を1歳魚が最も多く現れる8月から11月までの4ヶ月とすることで意見が一致した。また、対象魚種、漁法については禁漁区内では全魚種、全漁法を対象とすることとした【資料4】。

（2）資源管理活動

①実施体制

羽地、今帰仁漁協資源管理委員会では基本的に年3回委員会を開催している。また、禁漁期直前には禁漁区を示すブイの作成と設置を全員で行う。禁漁期間には交替で禁漁区の巡回を行い、漁業者や遊漁者、レジャーボート等に対して協力を求めている。また、新聞社や釣具店等をとおして周知活動も行っている。さらに、県水産試験場、普及センター、市町村及び周辺の漁協等の協力も得ている。県水産業改良普及センターには県内周知活動、管理方法等についての助言、ブイ設置作業の協力、県水産試験場には資源量調査、ハマフエフキの生息状況調査をもとに禁漁区域、禁漁の対象等について助言、資源量の推移について報告、名護市、今帰仁村は資金援助、委員会参加など資源管理への協力、名護漁協、本部漁協には共同漁業権区域内における資源管理への協力をしていただいている【資料5】。

②禁漁区の設置と周知活動

禁漁区を示すブイはフロートと塩ビパイプ、鉄筋、ロープ、一斗缶にセメントを詰めた重しで作成した。ブイの先端には点滅灯が付けられ、夜間でもその場所が分かるようになっている。これらのブイは禁漁期直前に資源管理委員及び漁協組合員により作成され、海上に設置される【資料6, 7, 8】。

禁漁開始時には地方紙2社に投稿し、記事として取り上げて頂いている。また、周辺の漁港など数カ所に資源保護への協力を求める看板を設置している他、チラシも作成し、釣具店の他、巡回時に漁業者、遊漁者らに配布している【資料9, 10, 11】。

③事業の成果

水産試験場が調査した1989年から2004年までの羽地、今帰仁地区にお

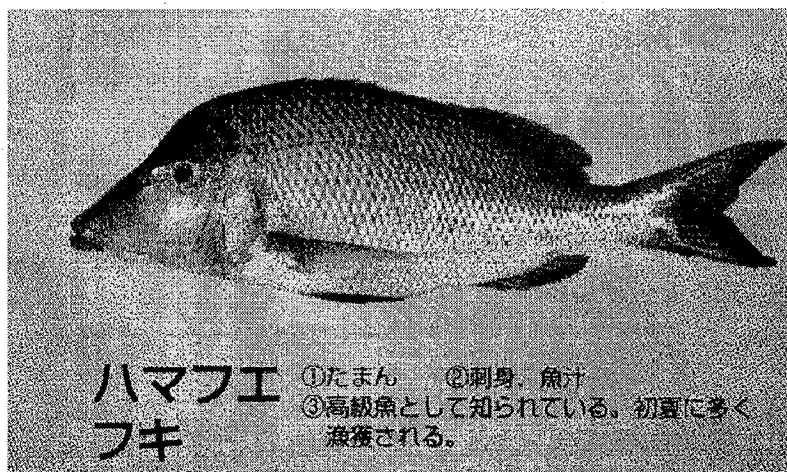
けるハマフエフキの漁獲量のデータによると、漁獲量は1999年から増加しているが、これは資源管理とは関係なく増加しており、おそらくその年に多数の加入群があったのではないかと考えられている。しかし、資源管理を開始した2000年以降も7トン以上の漁獲量が維持されていることが分かる【資料12】。また、ハマフエフキの年齢別漁獲量の推移をみると2000年以降、2歳魚、3歳魚の割合が増加していることが覗える【資料13】。

6. 波及効果

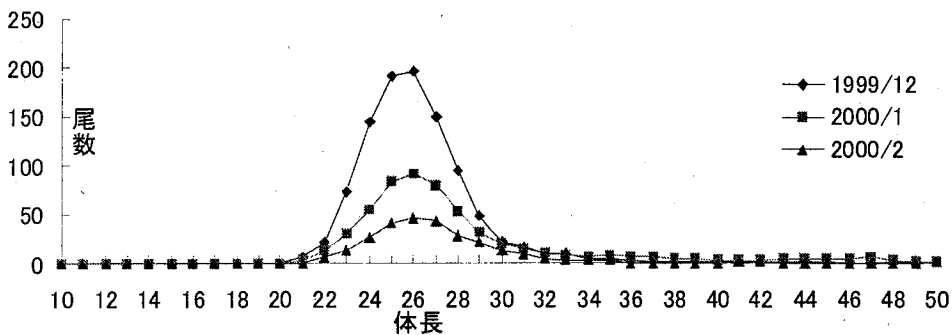
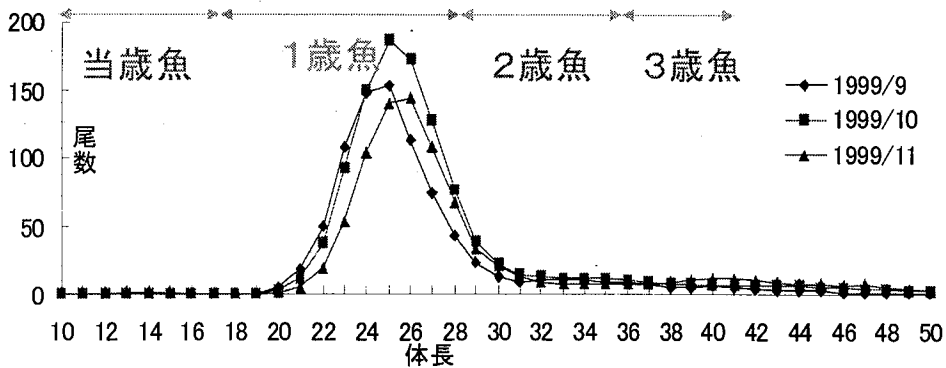
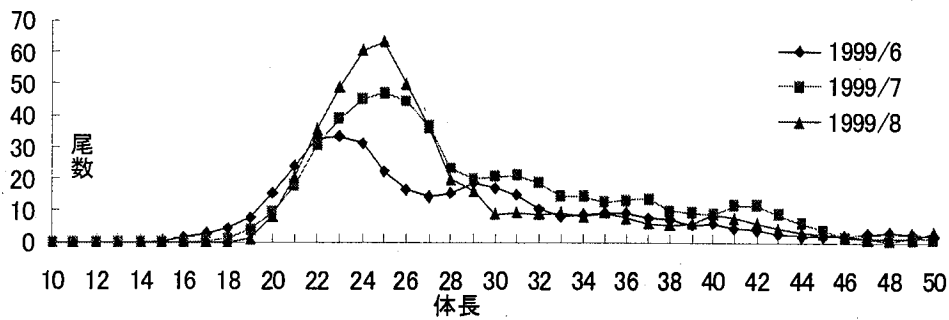
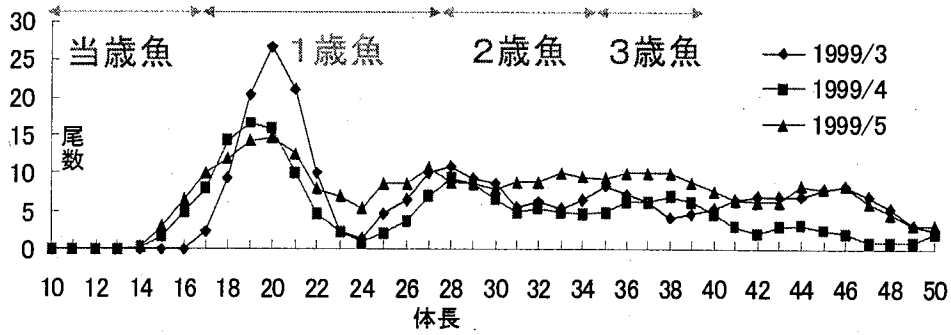
現場の状況としては、資源管理活動の取り組み当初は禁漁区内で刺し網等、漁業が行われた痕跡が発見される例が数件あったが、ここ2～3年でこういった事例はほぼ無くなった。これは資源管理委員や漁協職員等による周知活動が徹底された結果であり、周辺漁協等の協力のたまものである。また、本事業を取り組んできたことにより、地元漁業者等の中で資源保護の意義が浸透しており、ハマフエフキと同様に資源枯渇が懸念されるシラヒゲウニなどの海産物資源保護への意識が高まってきている。

7. 今後の課題や計画と問題点

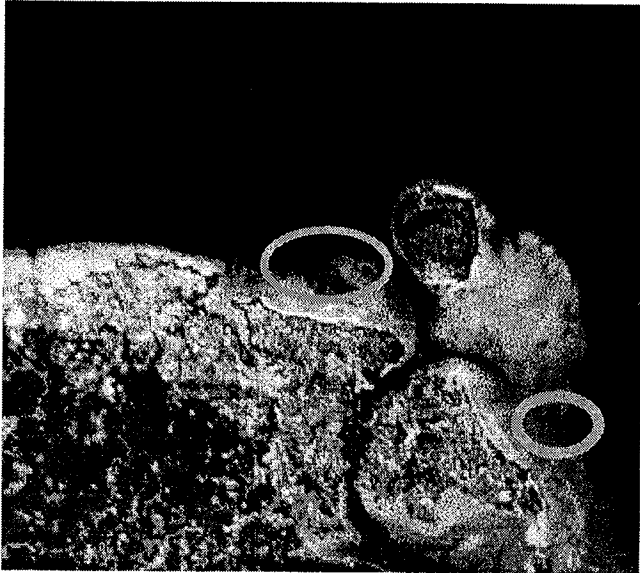
ハマフエフキは1年で体長約18センチとなり、4歳魚で1キロを超える。従って平成12年前後にハマフエフキの漁獲量が増加した要因については直接資源管理活動によるものとは考えにくい、その後漁獲量が維持されていることについては、少なからず同活動によるところが大きいと思われる。これは水産試験場のデータに基づいた禁漁区の設置及び禁漁期の設定が適切であったことに起因すると思われ、また、漁協並びに資源管理委員会の取り組みが徹底され、多くの漁業者等の協力が得られた結果であるといえる。本事業によるハマフエフキの資源量増加の規模は小さいものの、今後も継続してこの取り組みを実施し、その効果について確かめ、県内で行われた資源保護の好事例として全県に波及させていきたい。



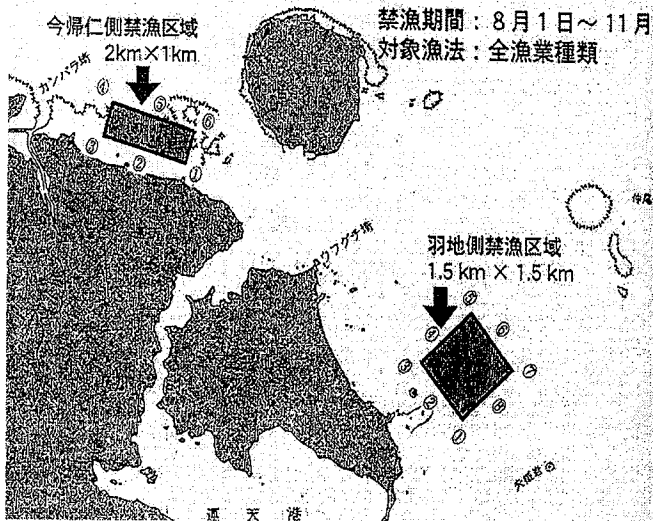
資料1. ハマフエフキ



資料2. 漁獲されたタマンの体長組成(1999年3月~2000年2月)

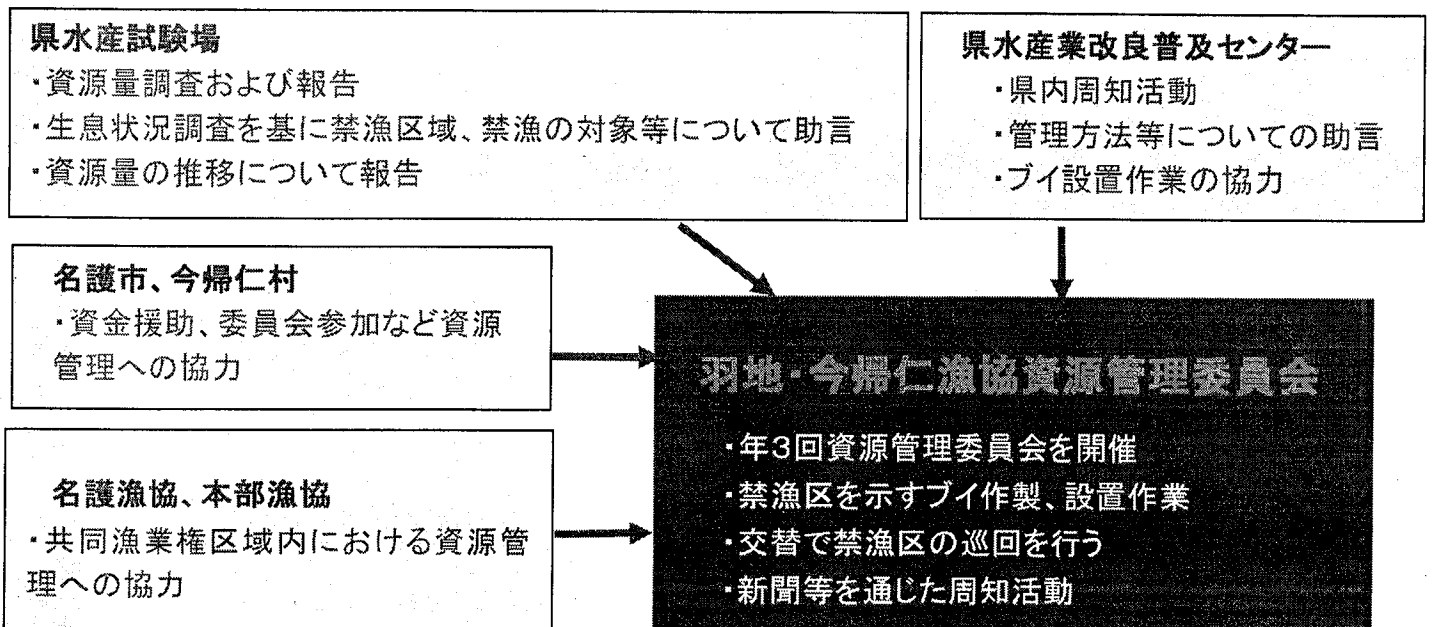


資料3. ハマフエフキの1歳魚出現地点



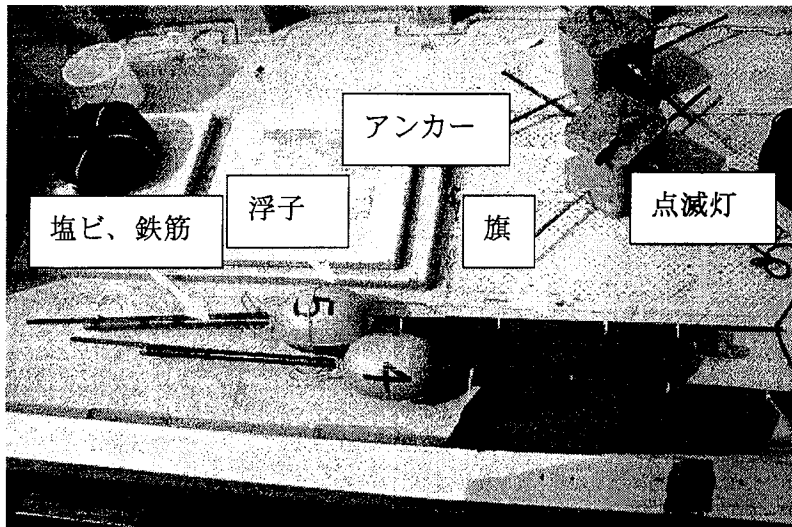
資料4. ハマフエフキ資源管理区域図

資料5. 資源管理の実施体制(下図)

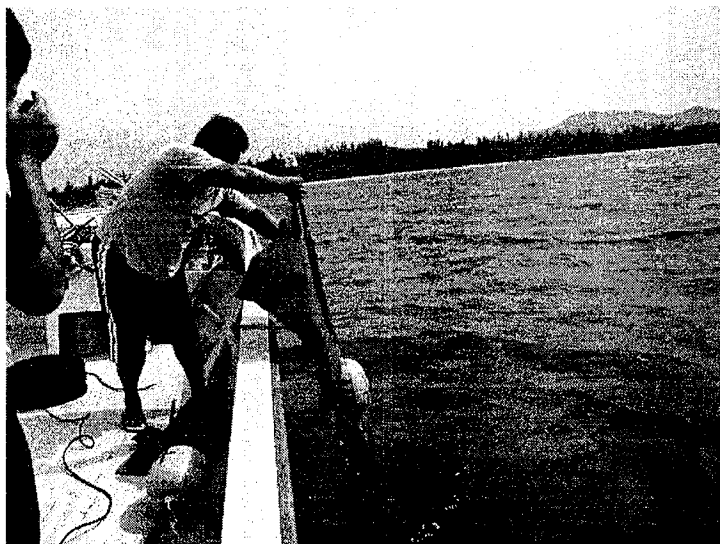




資料6. ブイ作製作業風景



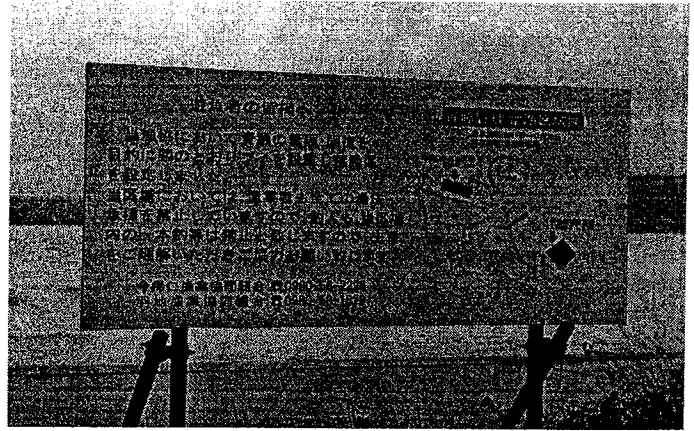
資料7. ブイの構造



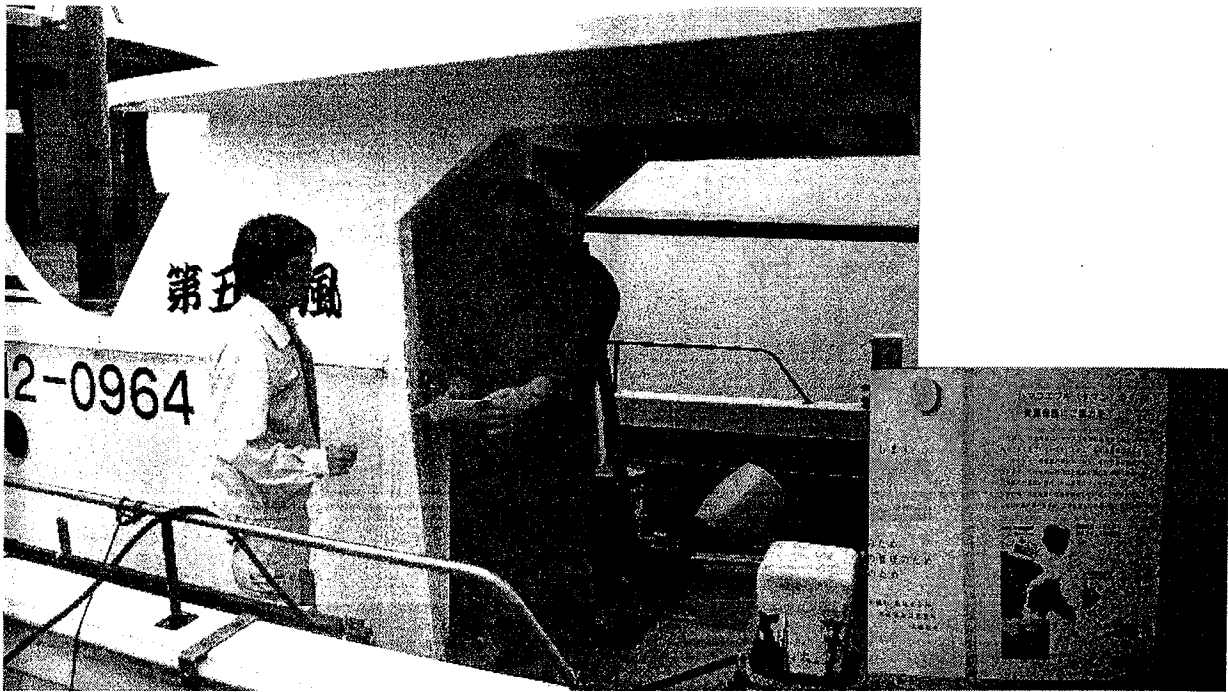
資料8. ブイ設置作業 (右下: 設置されたブイ)



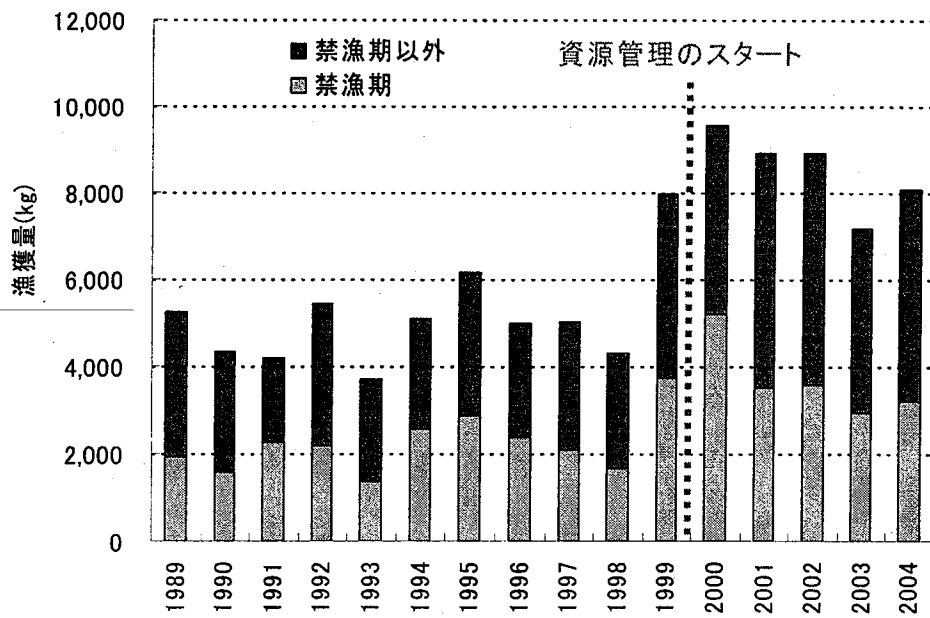
資料9 掲載された資源管理活動の記事



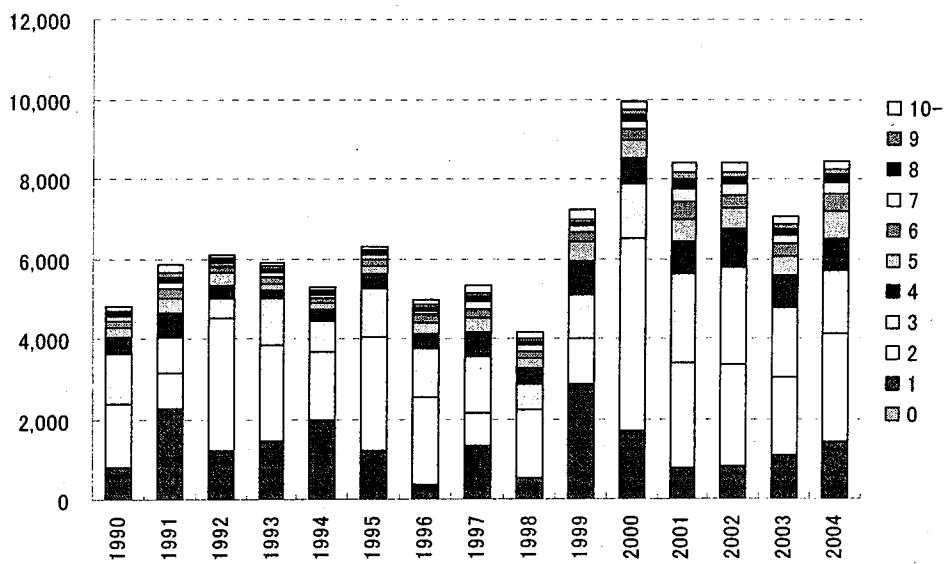
資料10. 資源保護への協力を訴える看板



資料11. 資源保護への協力依頼 (右下: 協力依頼のチラシ)



資料12. ハマフエフキの漁獲量の推移



資料13. ハマフエフキの年齢別漁獲量の推移